

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

地域農業が地域をつくる「福が栄える」里づくり

受賞者 ふくえさと 福栄里づくり協議会
かがわけんひがし
(香川県 東かがわ市)

■ 地域の沿革と概要

東かがわ市は香川県の東端に位置し、南は東西に連なる阿讃山脈によって徳島県に接している。瀬戸内海に注ぐ馬宿川、小海川、湊川、与田川、番屋川などの河川が北流し、上流域は狭小な谷底平野と山麓・丘陵地、下流域は平野部となっている。気候は、晴天の日が多く降水量が少ない、温暖な瀬戸内海特有の気候である。

平成15年4月1日に引田町・白鳥町・大内町の3町が合併して、東かがわ市が誕生した。地域では、江戸後期に日本で初めて製造に成功した白砂糖の和三盆糖、明治中期に始まり全国シェア90%の手袋、昭和初期に世界で初めて事業化に成功したハマチ養殖など特色ある産業が展開されている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

福栄地区は、東かがわ市中央部の中山間地域に位置し、明治23年の町村制度実施により「入野山、与田山、西山、東山」の4箇村が合併してできた旧「福栄村」を範囲とする。昭和30年に「白鳥本町、白鳥村、福栄村、五名村」の合併により「白鳥町」となった。

当該地区は、香川県と徳島県の境界に位置する阿讃山脈から流れ出る湊川の上流にあり、地形的には狭小な谷底平野と山麓・丘陵地で形成されている。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	旧村(26集落)
地区の性格	機能的な集団等
農家率 (内訳)	38.0% 総世帯数 547戸 総農家数 208戸
専兼別農家数 (内訳)	169戸 専業農家 58戸 1種兼農家 11戸 2種兼農家 100戸
農用地の状況 (内訳)	耕地計 183ha 田 171ha 畑 11ha 樹園地 1ha 耕地率 4.9% 農家一戸当たり耕地面積 0.88ha

土壌は壤土・砂壤土で食味のよい良質米の生産に適しており、全域でコシヒカリが栽培されている。

また、麦についてははだか麦を中心に昭和30年代までは盛んに生産され、その後、生産の不安定性や収益性の低下、コシヒカリの導入などで減少傾向にあったが、近年、集落営農の取組が始まって生産が拡大している。

園芸作物では、昭和20年代から30年代にかけてすいかの栽培が盛んであり、京阪神市場を中心に出荷されたが、病害の発生で産地は壊滅し、現在は青ねぎやアスパラガス（グリーン、ホワイト）、ブロッコリーなどが栽培されている。ほかにも、江戸後期から続く伝統の和三盆糖の原料としてさとうきびが栽培されている。



写真1 収穫前のはだか麦

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 県営ほ場整備の実施

福栄地区は、総世帯数547戸、農家戸数208戸、耕地面積183haの山間農業地域で、26集落からなっている。平成2年から10年にかけて県営ほ場整備事業を実施し、同時に21世紀型水田農業モデルほ場整備促進事業に取り組み、基盤整備田の約半分に当たる64haを10戸の担い手に集積した。

その担い手が「白鳥地区担い手部会」を組織し、研修会の実施などを通じた資質の向上に努めるとともに、作業受託の実施により農地の維持管理に取り組んできた。

平成10年には、中山間地域の自然環境を活かした減農薬・減化学肥料栽培米に、また、平成13年まきの麦からは、水田農業確立助成に取り組み、収益性の改善に伴って集団活動への意識付けが醸成されてきた。

しかし、当部会の構成メンバーは設立当初から固定されており、平成16年度の時点で、65歳を超えたメンバーが6人に及び、担い手の高齢化に対する対応策が求められていた。



写真2 基盤整備実施後の水田

イ 集落営農への取組

平成16年以降、米政策改革大綱の発表、品目横断的経営安定対策の開始など農業を巡る情勢の大きな変化があり、対応策などについて検討する中で、永続的な地域農業のあり方について担い手内部から問題提起がなされるようになってきた。

また、個々の集落においては以下のような問題が発生し、特定の担い手に農地を集積することによる弊害が表面化してきた。

- ① 農地の貸し手が長年、農業生産現場から遠ざかることにより、土地持ち非農家化が進み、地域全体で見ると次世代の農業従事者が確保できなくなってきた。
- ② 担い手農家と土地持ち非農家といった二極分化が集落内で発生し、土地利用調整が円滑に進まず、担い手の経営を圧迫する事例が出てきた。
- ③ 担い手農家において突然の不幸が発生し、それまで担っていた農地の維持管理ができなくなり、個別農家が地域農業を担うことの限界が見えてきた。

加えて、部会内のリーダー格の担い手の高齢化が進み、担い手本人がいつまで農業を続けられるか不安になってきたため、「どのようにして永続的に農業を継承していくのか」、「地域の農地を誰が守っていくのか」ということを本格的に議論しなければならなくなってきた。

そこで、平成17年から19年にかけて集落営農組織の設立に取り組んで地域（集落）での永続的な農業への展開を図るため、普及センター、市及び農協の支援を受け、集落ぐるみで地域の農地を維持管理する集落営農の必要性についての検討会を各集落で一斉に開催したほか、先進地研修を行った。

この結果、平成18年から20年にかけて5集落で農事組合法人、2集落で営農集団が設立された。現在、地区内の集落の約半分に当たる12集落で活動している。また、平成20年9月にはその横断的な組織として、東かがわ市集落営農法人等連絡協議会福栄支部（以下「連絡協議会福栄支部」という。）を組織し、生産組織相互の連携により生産技術の向上等に取り組んでいる。

こうした取組を通じて、福栄地区では効率的な農業生産や農地の有効活用が進んだが、さらに、このような農業を通して、地域の農産品や加工品、景観、伝統・文化の情報発信を行い、地域住民が生き生きと暮らすことができる福栄の里づくりが求められた。

(2) むらづくりの推進体制

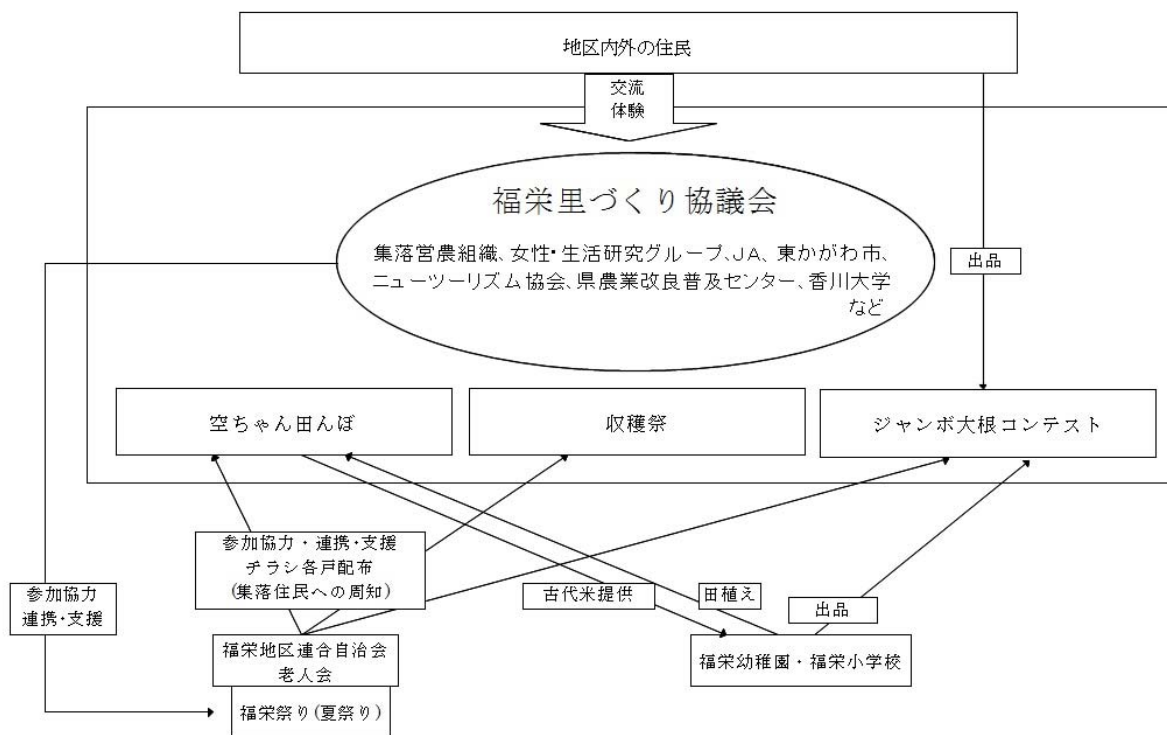
ものづくりだけでなく地域住民の交流促進や農村地域の元気づくりも重要であるとの観点から、連絡協議会福栄支部と地元で農産物の利活用に取り

り組む女性・生活研究グループが中心となり「福栄里づくり協議会」（以下「協議会」という。）を平成21年3月に設立し、事務局として東かがわ市ニューツーリズム協会が支援を行っている。また、地元小学校や老人会などが活動に参加し、むらづくり活動や交流活動に関わっている。

協議会設立当初は、農山漁村地域力発掘支援モデル事業も活用しながら、地域づくりに取り組んだ。

なお、協議会の構成員は多彩であるが、農業関係の組織・団体が多いため、今後は、協議会に入っていない地区内の組織にも加入してもらって幅広い地域づくりに取り組むこととしている。

第2図 むらづくりの推進体制



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

地域内の担い手に整備した農地の約半分を集約したが、その担い手の高齢化等による地域農業の将来に不安を覚える中、永続的な農業を行う集落営農の組織化に取り組み、農事組合法人等を7組織設立した。水稻をはじめ、麦や大豆、野菜の生産や加工に取り組みながら、もうかる経営を目指している。

また、平成21年に地域内の農業グループや、関係団体・機関、大学を巻き込んで協議会を設立して地域づくりを進めている。

地域性を活かした田んぼアートの「空(くう)ちゃん田んぼ」やジャンボ大根コンテストなどのユニークなイベントを実施して世代間の交流を強化し、地域の魅力を発信しながら、地域を活性化している。

2. 農業生産面における特徴

(1) ほ場整備による効果的な農業生産基盤の整備

中山間地域に位置する福栄地区の農地は狭小で不整形であった。

昭和50年代から60年代にかけて地区の周辺部で小規模な区画整理に取り組んだことを契機に、将来に向けて農業を守る基盤づくりをしようという気運が高まった。その後、地域の総意により平成2年から10年にかけて地区の中央部で実施された県営ほ場整備事業によって、平均30a区画の基盤整備田が133ha創出され、地区全体が一体として農業機械を使いやすい効率的な農地となった。

(2) 集落営農の組織化と農業生産の拡大

担い手が高齢化する中で、永続的な地域農業の展開を図るため、普及センター、市及び農協の支援を受け、各集落において集落営農組織づくりを推進した結果、平成18年から20年にかけて農事組合法人等が7組織設立された。平成20年にはその横断的な組織として、連絡協議会福栄支部を組織し、研修や情報交換を行っている。

各集落営農組織では、小麦・はだか麦や大豆の作業を機械化して効率的な生産を行うほか、地域の高齢者や女性の労力・能力を活かすため、労働集約型のブロッコリーや加工・販売が可能なそばなどの生産にも取り組んでいる。

麦は、中山間地域で冬期は低温になるなど条件が厳しいが、単収、品質の向上を目指し、適期は種、排水対策など適切な栽培管理に努めている。

大豆は、中耕除草作業の省略のため、狭条密植栽培に取り組んでいる。

各集落営農組織では、機械装備に当たって必要な機械を組合員が所有している場合は、それを借り上げて経費を節減しつつ、当該機械が使えなくなるまでに機械購入費を積立てるなどして、コスト削減に努めている。

また、担い手のいる農家では、集落営農により削減できた労働力を、さとうきび、アスパラガス(グリーン、ホワイト)、ネギなどの栽培に活用できている。

このような取組により、収益を上げてもうかる農業を実現するとともに、後継者の確保も目指している。

(3) 特産品を利用した加工品の開発と販売

女性・生活研究グループでは、福栄で生産される大豆、そば、ブロッコリー等の農産物を活用した加工品の試作・開発を行い、味噌、そばクッキー、ブロッコリーの茎の漬物を商品化し、収穫祭やジャンボ大根コンテストなどのイベントのほか、東かがわ市生活研究グループ連絡協議会が毎週金曜日に開く「生活研究グループの店」で販売し、好評を得ている。



写真3 法人女性部のそばクッキーづくり

3. 生活環境整備面における特徴

(1) 田んぼアート「空(くう)ちゃん田んぼ」

地区内の集落営農組織の一つである農事組合法人福栄中央は、福栄地区が四国霊場88カ所の結願88番大窪寺からの遍路道に当たることから、弘法大師空海にちなんで、平成21年から田んぼアートとして「空(くう)ちゃん田んぼ」づくりに取り組んだ。田植え作業には地元小学生が参加し、収穫した古代米は地元小学校や老人会に配られている。



写真4 展望台から見た空ちゃん田んぼ

また、取組を始めた年に病気の祖母の全快を願い通学途中で田んぼの弘法大師像にお祈りする小学生の姉妹の姿や、収穫された古代米を食べて体調が良くなった祖母が翌年の田植え作業に参加したことが新聞に取り上げられ、広く「空ちゃん田んぼ」が知られるようになった。今でも田植えから稲刈りまでの期間には、「空ちゃん田んぼ」を上から眺められるように田んぼに隣接して展望台を設置しており、記事を見た人やお遍路さんなどが訪れ、稲の生長とともに色合いが変化する様子を眺めている。この取組は、平成24年度で4年目となり、福栄地区の知名度向上に大きく貢献している。

(2) 収穫祭やジャンボ大根コンテストなどのイベントで交流促進

交流の場づくりとして、空ちゃん田んぼの田植えや稲刈りのほか、秋に

収穫祭、冬には様々な品種がある大根を素材としたジャンボ大根コンテストを平成21年度から実施している。

協議会を中心に関係団体が協力し、地元で収穫されたブランド米「福栄米」や野菜、地元産大豆を加工した豆腐、ブロッコリーの漬物などの地域で獲れた農作物の加工品、さらに地元で捕獲されたイノシシ肉などを試食・販売をしており、地域外からもたくさんの人を集めて交流を図っている。



写真5 コンテスト子どもの部入賞者

コンテストの対象品目に大根を選んだのは、一般の人でも栽培が容易な品目であり、幅広い層の人に出品してもらうためである。実際に、小学生や都市部の人からの出品も多くなっている。

また、伝統の和三盆糖とその原料であるさとうきびへの理解を深めてもらうため、都市住民との交流を目指して、収穫体験等の受け入れも実施している。

これらのイベントにより、地域間・世代間、地域住民相互の交流が図られ、福栄地区の魅力も発信され、地域が活性化している。

(3) 美しい農村景観の整備

田んぼアートや各種イベントの実施をきっかけに福栄地区が注目されるようになった。

そこで福栄地区では、田んぼアート以外にも、農作物収穫後の道路沿いの農地にコスモスを栽培して「コスモス街道」を演出したり、赤そばを試験的に植えたりするなど、農村らしい美しい景観づくりにも取り組んでいる。



写真6 美しく咲いたコスモス